

JAF AE Newsletter



No. 34 (September 2011)

第 28 回全国大会 京都外国語短期大学にて開催

プ ロ グ ラ ム

日時：2011年7月2日（土）10:00 - 18:10

大会総司会：相川真佐夫（京都外国語短期大学）

10:00-10:10

会場校挨拶：松田武（京都外国語短期大学学長）

会長挨拶：石田雅近（清泉女子大学）

10:10-11:40 基調講演

“Englishes in Asia: What ICNALE Corpus Tells Us”

ISHIKAWA Shin'ichiro (Kobe University)

11:40 - 12:10 会員総会

12:10 - 13:20 昼食休憩

13:20 - 16:30 研究発表

司会：田中富士美（東洋英和女学院大学）

1. “Interfacing language and literature in an Asian English: Implications for research and pedagogy”

Priscilla Angela T. CRUZ (Ateneo de Manila University, the Philippines)

2. “English in the linguistic ecology of Singapore: Issues and problems”

Patrick NG (University of Niigata Prefecture)

3. “Primary English Curricula of Japan and Indonesia: A comparative Document Analysis”

Tuswadi BANJARNEGARA (Graduate School, Hiroshima University)

4. 「英語力がアジア人意識に及ぼす効果 - アジア・バロメーターとアジア学生調査の計量分析を通して -」

嶋内 佐絵（早稲田大学・アジア太平洋研究科）
寺沢 拓敬（東京大学・総合文化研究科）

5. 「日本のヒップホップにおける英語歌詞の構造分析と意義」

野中 潔（熊本学園大学・国際文化研究科）

6. 「日本語から英語への借用語の形式的・意味的属性の統計分析 - 借用傾向抽出の試み -」

藤原 康弘（愛知教育大学）

16:35 - 18:05 シンポジウム “Applying corpus analysis to the study of Asian Englishes”

Moderator & panelist:

“Considering possibilities: Some concrete examples of corpus-based approaches to linguistic analysis”

Leah GILNER (Bunkyo Gakuin University)

Panelists:

“Statistical approaches to linguistic variation: Corpus linguistics for studies of Asian Englishes”

ISHIKAWA Shin'ichiro (Kobe University)

“Corpora in the expanding circle: From learner corpora to user corpora”

FUJIWARA Yasuhiro (Aichi University of Education)

18:05 - 18:10 閉会の辞：日野信行（大阪大学）

18:30 懇親会（11号館2階ラウンジ）



松田武 京都外国語短期大学学長による挨拶

第 28 回全国大会を振り返って

相川真佐夫（京都外国語短期大学）

日本「アジア英語」学会2011年度春季全国大会、第28回大会が京都外国語短期大学で開催された。2005年の第18回大会が併設校の京都外国語大学で開催されたため、同地での開催は10回ぶりの2度目となる。祇園祭りの宵山まで2週間というこの時期、大学正門前の四条通りを東の八坂神社に向かえば祇園祭りのお囃子の練習があちらこち

らから聞こえてくる。そんな「京都」を感じさせる時期の開催であった。

まず開会式では会場校学長の松田武氏、学会会長の石田雅近氏からそれぞれご挨拶をいただいた。続いて基調講演は、石川慎一郎氏（神戸大学）による“Englishes in Asia: What ICNALE corpus tells us”である。講演は様々な背景を持った聴衆に応じるため、“Corpus and English Studies,” “Englishes in Asia,” “English Learners in Asia”の3部で構成された。日本「アジア英語」学会の領域からすると、とくに第2部は社会言語学的な視点から、第3部は英語教育の視点から興味深い発見を提示され、コーパス言語学から与えられる大きな貢献を具体的に知ることができる機会となった。詳細は、次項の基調講演レビューを参照して頂きたい。

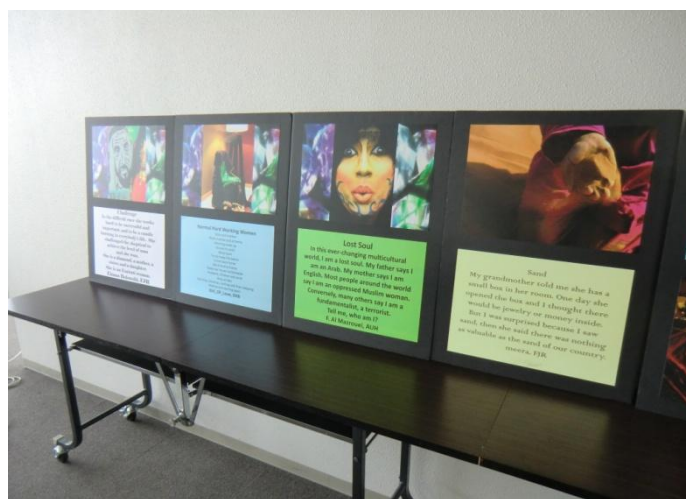
午後の研究発表は6件あり、田中富士美氏（東洋英和女学院大学）の司会により進められた。前半の発表者は、フィリピン、シンガポール、インドネシアの背景を持ち、本学会ならではの発表であった。Priscilla A. T. Cruz氏（Ateneo de Manila Univ.）は、フィリピン英語が映し出す文学作品が教育学的価値、言語と表象、その背景文化や歴史的文化理解へのより良き題材となることを考察した。Patrick Ng氏（新潟県立大学）は、シンガポールにおける言語政策、とくにシンガポール政府による介在に関する問題点に焦点をあてた。その中でも、英語の位置づけが向上するに連れ、英語話者と非英語話者との社会的境遇の格差が広がっている深刻な現状に一見平等に見える「多言語・多文化社会」の陰を感じた。Tuswadi氏（広島大学・院）は、インドネシアと日本の小学校英語についての教育政策を文献資料により比較分析するものであった。両国の文化背景が異なり、それゆえに比較することには多くの変数があるが、人口2億人を抱えるインドネシアの教育政策の行く先を知る発表は非常にインフォーマティブで刺激的なものであった。

後半は日本語での発表が3件続いた。まずは嶋内佐絵氏（早稲田大学・アジア太平洋研究科）と寺沢拓敬氏（東京大学・総合文化研究科）の共同研究発表「英語力がアジア人意識に及ぼす効果—アジア・バロメーターとアジア学生調査の計量分析を通して—」である。「英語力がアジア人意識を高める」という現象がアジア各国に普遍的に見られるか、どのような国や階層に特徴的に見られるものか、を調査したもので、言語とアイデンティティの分野に切り込んだフロンティア研究であった。野中潔氏（熊本学園大学・院生）は、日本のヒップホップにおける英語歌詞をコーパス分析し、英語表現と構造を、土着化された英語異種として考察した。この発表も他に類を見ないフロンティア研究と言えよう。最後の藤原康弘氏（愛知教育大学）による発表「日本語から英語への借用語の形式的・意味的属性の統計分析—借用傾向抽出の試み—」では、コーパス分析を通して、日本語から英語に借用された語の形式的、意味的属性を同定し、英語圏にて新たに受容された借用語、また今後認

知される可能性がある語を追究した。いずれの発表も「アジア英語」研究の大きな可能性を見いださせるものであり、大変有意義な時間を過ごすことができた。

大会プログラムの最後を飾るシンポジウム“Applying corpus analysis to the study of Asian Englishes”では、モデレーターに Leah Gilner氏（文京学院大学）、そして石川慎一郎氏、藤原康弘氏のご兩人に再度登壇して頂き、3名により、コーパス言語学とアジア英語研究の接点を討議するものであった。詳細は Gilner氏によるレビューを参照されたい。コーパス言語学がアジア英語研究に貢献しうるのは誰も疑いの余地はないが、コーパスを構築するデータの収集に注意深い配慮がなされないと、「アジア」という地理的要素だけをひとくりにするには本質を見失うことに繋がると感じた。

今大会はコーパスに始まり、コーパスに終わる内容であった。「アジア英語」研究のコーパス言語学とのコラボレーションにより、より一層の研究が進むことを期待する。



大会では ESSC の優秀作品がパネル展示された

基調講演レビュー

相川真佐夫（京都外国語短期大学）

石川慎一郎氏（神戸大学）に“Englishes in Asia: What ICNALE corpus tells us”と題した基調講演をいただく機

会を得た。石川氏は、コーパス言語学をはじめ、文学、脳科学など、多岐にわたる分野から言語教育へ新鋭な示唆を与え続けている多才な研究者であるが、本学会においても基調講演をいただけることになった。大変嬉しいことである。

石川氏は講演を3部に分け、それぞれの段落をコンパクトにまとめて頂いた。第1部では、コーパス言語学、辞書学から英語研究へのアプローチを概観し、コーパス言語学の可能性を提示していただいた。そのセクションがソフトな導入部分となり、本学会にとって最も興味深い位置にある第2部、第3部へと話が続けられた。第2部の **Englishes in Asia** はコーパス言語学が社会言語学に与えるものとして、第3部の **English learners in Asia** は英語教育に与えるものとして、石川氏から導かれる示唆が活かされる。



身振り手振りを交えて話される石川慎一郎先生

第2部では、石川氏は Inner Circle (IC) とアジアの Outer Circle (OC) の英語の本質を語彙や文法の観点から検証するものであった。IC と OC における英語は、どのような類似点や相違点を持つものであるか、これまで概念的な理論で語られることが多かった IC や OC の中身を明らかにしようとする点で非常に興味深い。石川氏は IC (UK、USA、ニュージーランド、オーストラリア) と OC (インド、香港、シンガポール) の新聞紙を基にしたコーパスにより分析を試みた。それによると、IC も OC においても頻度の高い語彙の依存度は同じ程度であるが、IC の方が OC の英語よりも語彙のバラエティが豊富であることを指摘した。また、IC の方が代名詞の使用が多いこと、より多くの不定冠詞を用いていることを指摘した。一方、アジアの OC は定冠詞をより多く使用している。これらの結果から、IC における新聞は人間主体の文章で書かれ、新情報志向であり、OC では物体主体の文章で書かれ、旧情報志向であるものと考察された。最も興味深い石川氏の指摘は、UK、ニュージーランド、オーストラリアの英語が一定の類似性を伴った集団に属す一方、アメリカの英語は IC よりも OC に近い様相を示していることである。

第3部は、アジア圏における英語学習者の「中間言語」に焦点を当てたセクションである。使用するコーパスは石川氏自身が独自に構築したもので、ICNALE

(International Corpus Network of Asian Learners of English) と呼ばれる。アジア圏の英語学習者の英作文を用いて構築したコーパスであり、集積されたデータは一定のコントロールをかけた英作文タスクに基づくものである。6つの地域—日本、タイ、中国、台湾、パキスタン、香港—の英語学習者のデータを含み、学習者の背景事情も含んでいる。その ICNALE は <http://icnale.por.jp/login.php> にて無料で利用可能とのことである。

日本人英語学習者はどのような語彙を母語話者よりも多く使うのか、より少なく使うのか、アジアの中でも日本人だけに特有の使用はあるのか、アジア圏で特有の傾向はあるのか、石川氏は ICNALE を通して分析された。その結果、日本人は1人称 I, we を多用することが明らかとなった。また他にも多用した語があるが、それらは英作文の指示文に含まれている単語であるという。一方、母語話者がよく使う婉曲的な意志を示す法助詞 “would” や、動詞の “believe” を、日本人英語学習者はまず使用しないことが指摘された。香港の人々の英語は母語話者の使用に近く、タイ人や日本人の英語は逆に遠いという。また、5つの国で “part” が頻繁に使用されたり、“people” や “smoking” が4つの国で多用されたりとの共通の現象も指摘されている。I は日本で特有で、“make” や “your” はタイで多いとのことである。

石川氏の巧みな話術に吸い込まれ、あっという間に時間が過ぎ去った。ICNALE の蓄積データはこれからもますます大きくなることで、さらに興味深い発見が続々と発表されることを期待したい。再度、石川氏が JAF AE の大会に戻ってきてくださり、さらに多くの発見をご教授していただくことを切に願う。

A Report on the Symposium “Applying corpus analysis to the study of Asian Englishes”

Leah GILNER (Bunkyo Gakuin University)

The theme of the symposium at the 28th JAF AE National Conference was “Applying corpus analysis to the study of Asian Englishes”. Three presenters - Prof. Shin'ichiro Ishikawa, Prof. Yasuhiro Fujiwara, and I - participated in the symposium. The aim was to provide an introduction to fundamental concepts related to corpus analysis while illustrating how the field of Asian Englishes might benefit from corpus-based approaches to investigation.

I started off the symposium by focusing on the discussion on the basics of corpus design. First, I gave

an overview of established design principles, with particular emphasis on the central notion of representativeness (and the complexity surrounding it). Then, the Brown Corpus, the British National Corpus (BNC), the International Corpus of English (ICE), and the Vienna-Oxford International Corpus of English (VOICE) corpus projects were used to exemplify how the same design criteria have been used to compile corpora that represent very different communicative events and, consequently, provide a means of making observations related to language use in diverse contexts. In closing, I described a collection of corpora of 26 English varieties that, together with colleagues, I have been compiling to serve as a testing ground for our research into a lexical core of English varieties.

Next, Prof. Shin'ichiro Ishikawa, introduced three basic statistical methods (i.e. regression analysis, cluster analysis, and correspondence analysis) and how they can be used to investigate linguistic variation. Prof. Ishikawa prefaced his presentation by explaining the peculiarities of language data when it comes to statistical analysis, pointing out that there exist an unknown number of cases, an unknown number of variables, and that the construct of 'normal' distribution does not apply when it comes to linguistic analysis. He then went on to describe each method in turn, providing interesting examples of each. Regression analysis was described as a means of modeling and explaining the relationship between a group of independent variables and a dependent variable using linear functions. In contrast, cluster analysis and correspondence analysis are exploratory techniques adopted mainly for data classification. He explained that the former aims to develop taxonomies from observed variables by sorting them into different subgroups; the latter aims to maximize the correspondence between the rows and columns of a two-way table and visualize the complicated relationships between items or categories. Prof. Ishikawa used data from his learner corpus, ICNALE, to illustrate how these techniques can be used to assist in the identification of patterns otherwise hidden in the variety of Englishes in Asia.

Prof. Yasuhiro Fujiwara's presentation focused on corpora in the Expanding Circle. Prof. Fujiwara, first, summarized the history of corpus linguistics and WE/EIL/ELF. He then pointed out

that there has been shift in the conceptualization of English speakers in the Expanding Circle from 'learners' to 'users', and accordingly a shift from learner corpora to user corpora. Prof. Fujiwara used VOICE, the Corpus of English as a Lingua Franca in Academic Settings (ELFA), his own Japanese User Corpus of English (JUCE), the Corpus of Successful Language Users, and the Asian Corpus of English as a Lingua Franca (ACE) as examples that illustrate this shift in conceptualization. The work of Vivian Cook was referred to, in particular, as a reminder of the fact that we take on a wide range of roles as communicators depending the purpose, context, and participants of a speech event; as such, roles such as learner and user often overlap. Prof. Fujiwara ended his presentation by asking the audience for their views on the issue of legitimacy when it comes to distinguishing between 'learner' and 'user' in corpus design.

This question led to a brief but interesting question and answer session. Questions and comments from the audience touched upon central issues in corpus linguistics including what kind of data should be used to build a corpus. The Q & A went far to remind us that corpus linguistics, as other branches of linguistics, is humbled by the complexity of language and many questions remain to be answered. It is just as certain that there are also many questions that have not yet been asked. As findings from corpus-based studies continue to accumulate, we can anticipate an evolution in ideas and understandings.



質疑応答をするパネリスト

会 計 報 告

樋口謙一郎 (椋山女学園大学)

1) 年会費納入について

現在、2011年度の会費の納入を受け付けております。納入方お願い致します。会費は、一般会員5,000円、学生会員3,000円です。ゆうちょ銀行以外の金融口座からもお振り込みいただけるようになりました。振込口座は下記の通りです。

★ゆうちょ銀行 (郵便局) からは、
加入者名：日本「アジア英語」学会
口座番号：00280-8-3239

★銀行などからは、
ゆうちょ銀行
○二九店 (ゼロニキユウ店)
当座預金口座 0003239
ニホン「アジアエイゴ」ガクカイ

Payment of the Annual Membership Fee

As our 2011 fiscal year has started, we would like to request you to pay an annual membership fee. Please pay the fee via postal transfer (5,000 yen for a regular member and 3,000 yen for a student member).

Account information:

Account holder: Nihon Ajia Eigo Gakkai
Account number: 00280-8-3239

2) 2010年度決算、2011年度予算について

2011年度会員総会時に2010年度決算、2011年度予算が承認されました。以下、報告いたします。

日本「アジア英語」学会 2010年度決算

収入の部			
費目	2010年度 決算額(A)	2010年度 予算額(B)	増減 (A-B)
年会費	871,000	1,120,000	△249,000
全国大会参加費	139,500	50,000	89,500
モノグラフ・紀要売上	51,400	40,000	11,400
ESSC ガイドブック売上		0	
大会補助金	0	0	0
7月全国大会懇親会費※	70,000	—	70,000
その他 (貯金利息)	44	0	44
前年度繰越金 (15周年積立金除く)	176,651	176,651	0
合計	1,308,595	1,386,651	△78,056

※事情により本年度のみ決算に収録。通常は独立採算

15周年記念事業積立金残高 (2009年度分まで)	400,000
------------------------------	---------

支出の部			
費目	2010年度 決算額(A)	2010年度 予算額(B)	増減 (A-B)
通信費	53,198	70,000	△16,802
ニューズレター印刷費	0	0	0
紀要制作費	182,490	200,000	△17,510
文房具	9,368	10,000	△632
全国大会	201,370	200,000	1370
人件費	35,900	50,000	△14,100
インターネット利用料・ ウェブサイト保守・管理	88,725	90,000	△1,275
印刷代	1,000	30,000	△29,000
事務局運営費	0	100,000	△100,000
モノグラフ補助費	0	80,000	△80,000
研究助成金	0	100,000	△100,000
15周年記念事業積立金	150,000	150,000	0
ESSC 事業費	100,420	100,000	420
次年度繰越金	486,124	206,651	279,473
合計	1,308,595	1,386,651	△78,056

上記の通り、ご報告いたします。

2011年6月20日 会計 樋口謙一郎

2010年度決算報告の監査を行った結果、適正であると認めます。

2011年6月25日 会計監査 猿橋 順子
会計監査 仲 潔

日本「アジア英語」学会 2011年度予算

収入の部			
費目	2011年度 予算額(A)	2010年度 予算額(B)	増減 (A-B)
年会費	1,120,000	1,120,000	0
(正会員 200名)	(1,000,000)	(1,000,000)	(0)
(学生会員 20名)	(60,000)	(60,000)	(0)
(法人会員 2名)	(60,000)	(60,000)	(0)
全国大会参加費	50,000	50,000	0
モノグラフ・紀要・ ESSC ガイドブック売上	40,000	40,000	0
大会補助金	0	0	0
前年度繰越金	486,124	176,651	309,473
合計	1,696,124	1,386,651	309,473

支出の部			
費目	2011年度 予算額(A)	2010年度 予算額(B)	増減 (A-B)
通信費	150,000	70,000	80,000

ニューズレター印刷費	0	0	0
紀要制作費	200,000	200,000	0
文房具	10,000	10,000	0
全国大会	120,000	200,000	△80,000
人件費	50,000	50,000	0
インターネット利用料、 ウェブサイト保守・管理	90,000	90,000	0
印刷代	10,000	30,000	△20,000
事務局運営費	50,000	100,000	△50,000
モノグラフ補助費	80,000	80,000	0
研究助成金	100,000	100,000	0
15周年記念事業積立金	150,000	150,000	0
ESSC 事業費	150,000	100,000	50,000
次年度繰越金	436,124	206,651	229,473
合計	1,696,124	1,386,651	309,473

15周年積立金残高(2010年度分までの積立額・確定) 550,000

紀 要 編 集 委 員 会 よ り

紀要編集委員長 日野信行(大阪大学)

昨年度以来、紀要への原稿提出は、郵便ではなく、電子メールの添付ファイルでご提出いただくことになっております。投稿規程の詳細は、学会のホームページ

(http://www.jafae.org/journal_contri_rule.html) をご覧いただければ幸いです。原稿のテンプレートもダウンロードできますので、どうぞご利用ください。投稿の締め切りはこれまで通り、11月30日です。

事 務 局 よ り

第 29 回 全 国 大 会 研 究 発 表 者 募 集

第29回全国大会(2011年12月10日(土)於、椋山女学園大学[名古屋市千種区星が丘])で研究発表を希望される会員は、アブストラクト(日英どちらか)をA4 Word 文書1枚にまとめ、10月1日(土)までに事務局に電子メールの添付にてお送りください[jafae@live.jp]。審査を経て発表者を決定いたします。

C A L L F O R P A P E R S for the 29th National Conference

CALL FOR PAPERS for the 29th National Conference on Saturday, December 10th, 2011 at Sugiyama Jogakuen University in Nagoya. Please submit a 1-page abstract as MS Word attachment by October 1st, 2011, to the JAF AE Secretariat at [jafae@live.jp]. All submissions will be carefully reviewed.

ニューズレター編集担当より

勤務校の学生の引率で年1・2回シンガポールへ行くのですが、そのたびにインド人街に出向いてインド映画のDVDを買いあさっています。DVDの価格はインド本国の2倍から3倍しますが、それでも日本円で500円から1000円程度です。シンガポールの販売業者(インド系の人が多い)は、消費者心理をよく心得ていて、人気作品や最新作の価格を高め設定しています。

私はおもにBollywood(ムンバイで製作されるヒンディー語映画)を買うのですが、特に最近のインド映画に顕著な傾向は、セリフに英語が多く混ぜられることです。都会の教育のある層を主人公にした映画では、せりふの約半分が英語である映画も珍しくありません。また、シンガポールのBollywood販売コーナーには、*Bend It Like Beckham*、*Bride and Prejudice*、*Monsoon Wedding*、*Namesake*、*Salaam Bombay!*、*Mississippi Masala*のような英米で製作されたインド人(インド系)を主人公とする英語映画が販売されています。そういう映画は、せりふの90%以上が英語ですが、おそらく、インド系の人たちに需要があるのでしょう。

ニューズレターは会員の皆様の大切なコミュニケーションの場です。会員の皆様からのご投稿を歓迎しております。国内外の紀行文、書籍紹介、海外情報など、「アジア」「英語」「言語」などをキーワードに、日本語800~1,200字程度、あるいは英語ではA4用紙2/3~1ページの分量で投稿して下さい。編集の都合上、投稿を希望される方は、あらかじめ編集担当の榎木蘭(htenokizono@yahoo.co.jp)までご連絡下さるようお願い申し上げます。

2011年9月13日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 石田雅近

編集長 榎木蘭鉄也

事務局

〒615-8558京都市右京区西院笠目町6

京都外国語大学 外国語学部 英米語学科

相川真佐夫研究室内

E-mail: jafae@live.jp

FAX: 075-322-6079

学会ホームページ: <http://www.jafae.org>

年会費振込先: 郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

Prof. Masao Aikawa

Faculty of Foreign Studies

Kyoto University of Foreign Studies

6 Saiin Kasame-cho, Ukyo-ku,

Kyoto City 615-8558 JAPAN

E-mail: jafae@live.jp

FAX: +81-75-322-6079

JAF AE's website: <http://www.jafae.org>

JAF AE's postal transfer account number:

00280-8-3239